



Title	学校教育の可能性を信じて -大震災被災校とコロナ禍の新設校での実践-
Author(s)	佐藤, 淳一
Citation	明治大学教育会紀要, 14: 61-83
URL	http://hdl.handle.net/10291/22615
Rights	
Issue Date	2022-03-31
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

Ⅲ 講演

学校教育の可能性を信じて —大震災被災校とコロナ禍の新設校での実践—

元石巻市立雄勝中学校校長
前仙台市立錦ヶ丘中学校校長
佐藤 淳一

○司会者 では、本日、お話を頂戴します佐藤淳一先生をご紹介します。

佐藤先生は長く宮城県の中学校教員としてご活躍なされました。仙台市立五橋中学校を初任校とされ、その後、教育委員会では主任指導主事として後進のご指導もなされています。

2010年、石巻市立雄勝中学校の校長先生として就任されることとなりますが、初めての卒業式の日にあの東日本大震災で被災されることとなります。それからは子どもたちのためにまさに八面六臂（ろっぴ）のご活躍をなされます。先生の著書、玉稿であられる『奇跡の中学校』で私はそのことを知ることとなりました。本日はこの頃のお話もたくさんしていただけることと存じます。

改めて、教師、先生と子どもたちとの関わりにつきまして佐藤淳一先生と一緒に考えていきたいと思えます。

では、佐藤先生、どうぞよろしく申し上げます。

○佐藤 皆さん、こんにちは。このような機会を頂いたことに感謝します。コロナ禍が今は小康状態にありますが、長きにわたり、本当に大きなストレスを全ての人々が受けているという状況下です。とりわけ、子どもたち、学校現場の先生方、教育関係者の方々のその大きさというものは、本当に大変な状況下だと思っています。今日の私の話が、ささやかながらでも、その方々にエールとして届けることができたらと思っています。よろしく申し上げます。

1 はじめに

あの震災の津波により廃墟となった学校を立ち上げていくという経験と、コロナ禍の中で新設校をつくっていくという経験をしました。今日は、その話を中心にさせていただきます。

2 「3.11」その日は卒業式だった

まずは、10年7カ月前の「3.11」の日に立ち返ってみることから始めたいと思えます。今、スライドに映っているこの子たちは中学生ですが、この子たちは全員、家が流されて、ありません。そして、肉親を失った子どもたちも1人や2人ではありません。この子たちと共に歩んだ1年を、まず紹介させていただきます。

雄勝中学というのは、仙台から東北東に車で2時間ほどの典型的なリアス式海岸の中に

あり、震源からも非常に近いところです。基幹産業はもちろん水産業で、ウニやホタテやアワビなどです。そして、ご存じの方もいるかもしれませんが、「雄勝硯」という、日本で一番のシェアを誇った硯の産地でもあります。さらに、600年以上の伝統を持つと言われる「雄勝法印神楽」は、ものすごく勇壮な舞です。このように小さな町ですが、そのような伝統や工芸など、自然が豊かな、本当にキラリと光る美しい町でした。

雄勝中学校は、この雄勝湾の一番奥まったところにありました。そして、道路を挟んで雄勝小学校、峠を越えて船越小学校です。あの当時、特に福島から宮城、岩手、青森と、沿岸部が被害を受けます。高台にあつて難を逃れた学校もありますが、うちの中学校区は、3校とも全て津波によって飲まれています。そのような意味では、最も過酷な状況下に置かれた学校の一つだとも言われました。あの大変な状況になった大川小学校は隣の学区で、峠を挟んで5分ほどのところにあります。

当日は卒業式でした。私が赴任して初めての卒業式ですので、心を込めて温かくみんなを送り出そうということで、随分時間もかかりました。私は式の中で、校長の最後のメッセージとして「たくましく生きていけ。自らの人生を自らの力で切り拓いていけ」という言葉を送りました。



その日は卒業式だった

そして、この集合写真を撮ったのが13時ちょうどです。随分延びてしまったのです。地域の方も参加して、本当にみんなで感動的な卒業式をつくり上げて、その高揚感の中で、私も人生初めてのピースサインをここでしているわけです。しかし、この後ろに並んでいる保護者の方の中には、人生最後のピースサインになった方もいるわけです。

子どもたちは、このあと下校していきます。そして、主だったものを片付けて遅い昼食を取り、職員室で安堵（あんど）感に浸っていたとき、そのときが訪れます。ものすごい揺れでした。震源に近いこともあるのですが、とにかく外に出ろということで、校庭の真ん中に逃げていくわけです。もう落下してくるものはない、命の危険はない中であっても、あのものすごく長い揺れというのは、生命体としての恐怖、もうこの世が終わるといふような思いを感じたのを、今でも時々フラッシュバックします。

私は、校舎が崩れ落ちるのではないかと思い、校舎ばかりを眺めていました。長い長い揺れが終わり、「次は津波だ」ということはすぐに予感したので、山に逃げていくわけですが、その後、町を襲った津波によりこの体育館は丸ごと流されていきます。

先ほどの集合写真を撮っていたのですが、階段だけが残っているという状況です。雄勝中学校は3階建ての校舎です。これは、前日の3月10日の朝日を浴びて非常にきれいな美しい校舎です。屋上と同じ高さに大きな時計があります。見ていただくと分かるのですが、津波はここをはるかに越えていきます。



3月10日の朝日を浴びる雄勝中学校



校舎の脇に体育館の残骸が・・・卒業式の紅白幕がみえる

体育館はどこに行ったのかと思ったら、やはり校舎の片隅のほうに残骸となってありました。つい先ほどまでお祝いの象徴だった紅白の幕が、無残にもこのように引っ掛かっています。校舎周辺はこのような状況です。

職員室です。部室周りです。学校の脇には公民館があったのですが、バスが乗っていました。小学校は2階建てですが、屋上には2階建ての一軒家が丸々乗っていました。いかに津波が高かったか、ものすごい猛威だったかが分かるかと思います。

雄勝の町は、このような状況です。丸が中学校、これは被災前の写真です。私はここに住んでいました。ここに住んで雄勝中学校に通っていましたが、町は壊滅してしまったのです。

私たちは山に逃げたので、町を津波が飲み込んでいくその瞬間は見えていません。次の日、初めて山から下りて町の光景を見ます。これが、そのときの状況です。まず、言葉になりませんでした。後々、よくテレビ局のインタビューで「このとき、何を感じましたか」と質問されても、言葉が出てこない。ただ茫然と立ち尽くすしかなかった。ただ、願わくば子どもたちです。このリアス式海岸特有の急峻な山が迫っている中を、何とか自分たちのように共に逃げ切っていてほしい、77名いる生徒に、とにかく生き残っていてほしいという願いだけでした。



12日未明 ただ茫然 生きていてほしい

3 手書きの名簿による安否確認

私たちが避難したところには、子どもたちが13名だけやって来ました。長くて寒い夜を越えて、次の日にやっと、流されなかった家から米が届いて、おにぎりをもらったときのシーンです。子どもたちはサンダル履きで逃げてきたりしていました。私たちは車で逃げたので、車の中から防寒具を分け与えたり、履物を分け与えたりして、何とか長い夜を越しました。

この端の2人の子どもたちをご覧ください。
当時中学1年生のお姉ちゃんが、4歳になる弟におにぎりを渡したところです。きっと、

寒い夜を越すために、気を紛らわすために、この紙飛行機を作ってあげたのでしょうか。実はこの2人のお姉ちゃんは、前日卒業式に参加した3年生でした。お母さんはその式に参列したあと、お父さんに「今日は卒業式だから仕事に行かなくていいのでは」と言われながらも、職場が心配だということで、雄勝病院に行きます。そこで地震に見舞われるわけです。患者たちを1階から2階、2階から3階、屋上まで上げて、そしてそこで津波に飲まれてしまいます。



山の中へ避難 おにぎりをもろう 長く寒い夜が続く

この女の子は、お母さんが津波に飲まれて亡くなったということ、ずっと受け止められないのです。学校が再開して、作文を書かせました。そのとき、他の親を亡くした子どもたちは、その悲しみを作文に書き記すわけです。ところが、この子は一切書かなかった。部活も一生懸命して、勉強も一生懸命する。涙を一切流さないで、どのような心のありようであるのだろうか、私はそのことを思うだけで、校長室で涙を流していました。

実は3年前、この子たちが二十歳になったときにNHKが雄勝中学校のドキュメンタリー番組の1時間ものを作り、全国放送されました。その中で、この女の子が初めて吐露します。「私は当時、心をシャットダウンしていた。この弟をあやしながら、どうしても泣きたくなくなったときは、部屋のドアを開けられないように、ドアを背中にして、そこにしゃがみ込んで1人で泣いていた」と。やはりそうだったのかと、改めて思った次第です。

あのとき、1万8,425人の方が犠牲になりました。そのときに、家族1人が亡くなるのはものすごく大きいことなのに、その数が多いにも大き過ぎるために、一つの命の重さというものをどう扱われたのか、どう感じたのかということをも考えさせられます。

うちはお母さんが亡くなった。でも、あの友達のご両親が亡くなっている。中には、5人家族で小学1年生の女の子がポツンと残っただけで、全員流されたという子もいる。だから、自分の悲しみをグッとしまい込んで、胸の中にしまい込んで、そして耐え忍んだという人たちもいるのです。

1万8,425人、その方々一人ひとりに夢があり人生があり家族があったわけです。そして、生きてくても生きられなかった命だったわけです。実は、その方々につながる家族や友人や恋人だったり、その何倍もの数の方々が今も癒されずに、胸にそのようなものをしまい込んで、何とか歯を食いしばって前を向こうとしている、そのような状況下にあるということです。

沿岸部に行くと、みんな元気に私たちに対応してくれます。それで「逆に元気をもらう」こともよくあります。でも、本当はそのようなものを今も胸の中にしまい込んで生きているということ、やはり同じ時代を生きていく私たちが、子どもたちが、そのような人たちへ気持ちを寄り添うことができるように、やはり教育の力により心を育んでいかなければならないのではないかと強く感じます。

とにかく、子どもたちの安否確認をしなければいけません。77 名の名簿も何も一切なくなってしまったわけです。手元には何もない中に紙が 1 枚あったので、それに中学 3 年生の担任だった先生と養護教諭の 2 人の先生が、名簿順に漢字でしっかりと全員分の名簿を書き上げて作りました。この名簿に、一つ一つ探しては、生存を確認して丸を付けていくわけです。これは、そのときの原本です。とにかく、この丸一つが単なる丸ではない、命の丸なのです。とにかくこの丸を求めて、そこから本当に毎日悪戦苦闘の日々が続いています。



手書きの名簿で安否確認

そして 3 日間を山で過ごしたのですが、もうそこには生徒たちが来ることはないだろう、安否確認も進まないということで、山を脱出します。そして雄勝の方々がヘリコプターで運んでこられる、飯野川地区の飯野川中学校のパソコンルーム、体育館の向かいの部屋を、校長先生にお願いして一室を借りて、仮の職員室を置きます。そこに私は 1 人で寝泊まりをしながら、まだ危険な峠を越えて雄勝に入っていきます。



生徒の安否確認で涙をまわる

ところが、雄勝に入っていくと、浜浜はこのような状況です。もう何もないのです。このような状況下でも、子どもたちがどこかの避難場所に「いる」と聞けば、そこに行って元気でいると飛び上がってお互いに喜び合うような日々が続くわけです。そして、帰りは必ず大川小学校の前を通ります。



大川地区は水没したまま

これは、大川小学校を背にして帰ってきたところです。大川小学校の脇を通ると、学校の脇の道路に、整然とランドセルが並んでいます。赤いランドセル、黒いランドセル、黄色いカバーのランドセル。整然と並んだランドセルの数の分だけ、子どもたちが……。もちろん、カメラのシャッターは押せなかったし、直視できなかった。本当に、目をそこに向けることに耐え切れないような状況下でした。

これは、ちょうど北上川が決壊してここに水が入り、大川小学校は手前にあるのですが、ここは完全に湖になっています。そこに自衛隊が、車が通れるように鉄板を引きました。そこを、今日も何人かの生徒の生存を確認して帰っていくというシーンの写真です。

4 子どもたちは全員生きていた

このような状況下ですから、やはり校長として、もしかしたら雄勝中学校の生徒も、1人か2人は覚悟しなければとよぎるのです。でも、「いや、そのようなことは考えてはいけない」と払拭しながら、一日一日、先ほどの丸を求めて子どもたちを探していきます。

そして、何と奇跡が起きます。3月19日15時の段階では、まだ2人が見つかりません。ところが19時6分に全員が見つかりました。あの惨状下をよくぞバラバラに77名が逃げ切ったということで、本当に奇跡だと思います。職員はみんな自宅に、安否確認に戻っていますから、仮職員室にはまだ私しかいません。1人で何度も何度もガッツポーズをして、「バンザイ」「神さま、ありがとうございます」と叫んでいました。あれほど体中で喜びを表現したことはないのではというくらいです。

なんといっても子どもたちが全員生きていたのですから。

私は、すかさず「たくましく生きていけ」と、黒板にメッセージを書きました。ずっと眠れなかったので、「やっと今夜はゆっくり眠れるかな」と思ったのですが、やはり興奮して眠れず、「子どもたちが生きていた」ということがうれしくて、ハイになっているのです。

ところが、次の言葉がよぎった瞬間、奈落の底へ落とされます。「じゃあ、これからどうする」と。子どもたちは全員無事だった。でも、地域は全て流された。子どもたちの家も全てない。職員の家も流されている。実は、職員も1人亡くなっているのですが、この段階ではまだ分かりません。そのような中で、学校すらなくなったこの状況で、「学校教育ごときに何ができるのか、新米校長のおまえに何ができるのか」。そのことで自分の無力感、絶望感というか、そのようなものに押しつぶされそうになり、さらに眠れずももんもんと夜が更けていくのです。このような状況下では、学校教育は何て無力なのだろうと感じたり、思ったり、学校教育はこのようなときに何もできないのだと。

夜が更けていきます。夜中の3時です。やはりこの状況を、全員が無事だったことを地域の方に知らせようと、模造紙を半分に切って、マジックで書いて窓に貼り出します。私が1人で寝泊まりしていた窓の向こう側に体育館があり、雄勝の方々が何百人と雑魚寝をしています。やはり、硬い床で眠れないのです。そうすると、もう未明から起きている人たちが中庭に集まり出します。そして、ある人がこの貼り紙を見つけたのです。そうしたら「ワーッ」と拍手が起きました。

このときです。私は、「学校教育こそがあなたたちを守る」と。何の根拠もありません。ただ、やはりあの人達にとって、当時は「今日をどう生きる、明日をどうする」という状況下の中で、子どもたちが全員生きていたということは、本当に暗闇の中の光を見る思いだったと思います。「子どもは宝だ」とよく言いますが、あのときほど私は実感したことはありません。子どもたちは宝なのだ。やは



避難所から大きな拍手が

り、子どもたちが生きていけば復興にもつながるし、未来があるのだ。実際に教育そのものが、未来をつくる営みを、私たちは子どもたちを通してしていることに間違いはないわけです。あのときは、本当にそれを実感しました。

とにかく「できるかできないか」ではなく「やるしかない」のだと、ここから私は腹をくくり、学校づくりを、再開を目指して動いていくこととなります。ここから怒涛の日々がまた続くのですが、それはここでは割愛させていただきます。

5 新生「雄勝中」を目指して

学校を創り上げることを始めるのですが、他の中学校の校長先生と私が少し違うと思ったのは、他の学校の校長先生方は、何とか学校を元の水準まで戻して、学校が普通に営まれるようにしたいという思いがありました。私はそのような思いは全くなくて、全てなくなったのですから、とにかく新しい学校を創るつもりでやろうと思いました。

そして、職員には、「今の教育はあまりにもぜい肉を付け過ぎている。それをダイエットしていくのは非常に大変な作業だとしたら、校舎も何も全てなくなったのだから、ゼロから学校を創り上げていく気持ちでやろう」という話をしました。新たな校訓も設置して、30年の歴史があることを全てリセットし始めるわけです。そして、いろいろなことを新たに組み込んでやっていくことにしました。

そうでないと、あれほど大変な状況下に置かれたあの子たちが浮かばれないのです。例えば、学校が元に戻っても、あの子たちにとってはマイナスなのです。家も家族も失っているわけですから。だとしたら、前よりももっと良い教育環境を創りたいと、このとき環境は厳しかったのですが、やっていくしかないという思いで学校づくりを始めます。

校訓を、入学式で私は掲げます。「たくましく生きよ。」卒業式に贈ったメッセージ、ホワイトボードに書いたメッセージを、そのまま校訓にしました。何かシンボルになる、みんなでここから立ち上がっていく言葉が欲しかったので、これを校訓としたのです。

高校の教室を4教室だけ間借りしてスタートしました。入学式は、会場が非常に立派に見えますが、高校で行った入学式会場を「片付けないでそのまま使わせてください」と、高校の副校長先生に無理にお願いしてやっと実施することができました。

このときに、新入生があいさつを代表としてするわけです。この子が話した誓いの言葉、入学生代表の言葉を、私が代読します。

「僕は、3月11日に起きた東日本大震災で、襲ってくる津波を目の当たりにして、信じられない自然の力におびえながら必死に逃げました。

学校や家が飲み込まれたのを知ったときには、この先どうなるのか、不安でたまりませんでした。特に母が津波により亡くなってしまったのを知ったときは、悲しみと不安で涙が止まりませんでした。

しかし、母が望んでいるのは、泣いて生きるのではなくて、家族や仲間と共に強く生きていくことだと思ったとき、僕は、この中学校生活3年間を自分なりに一生懸命頑張らなければならぬと思い始めました。

母は、僕の心の中でいつまでも生き続けて、僕を励まし支えてくれています。そんな母の気持ちに応えられるよう、家族や仲間、先生方と共に、中学校生活を頑張りたいと思っています」。

普通は、中学生に入るときの夢と希望を語って、元気はつらつとしてあいさつをしてくるのですが、この子は自然の恐怖、絶望、そして母との死別、そして生きる決意を持って入学してくるのです。私は「この子たちのためなら何だってやる。全てを注ぐ」と、本当に新たな誓いをここでするわけです。

うちの学校だけだったと思います。制服が全部流されて無いのは。だから、子どもたちは全国から送られてきた、体育館にある大きな段ボールに入っている中から服を引っ張り出して、自分に合ったサイズのを着て入学式に臨んでいます。

学校は何とか再開しました。これも大変な作業がありました。ところが、私が驚いたのは、これです。給食が始まったら、コッペパンと牛乳たったこれだけなのです。もちろん、これは石巻だけではなくて仙台市内も簡易給食でした。でも、被災が小さかった学校は、子どもたちが家からおかずを持ってきたり、おにぎりをプラスアルファで持ってきたりしていました。ところが、うちの子どもたちはまだ避難所暮らしなので、このようなことができないのです。しかも小学校用のサイズのコッペパンです。たったこれだけで、中学生に1日勉強したあとに部活をやれというのか。

私は、教育委員会に本当にかみつきました。そのときは、近くのコンビニもスーパーも再開していましたから、ある自治体は業者の弁当を給食に取り入れたという情報もありました。何とかならないのかと、「子どもたちにごはんを腹いっぱい食べさせるのが大人の責務ではないのか。本当に、生きることの根幹です」と訴えたのですが、受け入れてはもらえなかった。

当時、いくら被災地とはいえ、とにかく子どもたちに、あのような大変な思いをした子たちに、ひもじい思いだけはさせたくない。腹をすかせた思いだけはさせたくないという思いで、「営業に行ってくる」と言っってはかばんを持ち、仙台市内でいろいろな方たちと会っています。待ちの姿勢ではなく、自分から求めていくという動きをしました。

そして、実はそれが本当に多くの方々と出会い、雄勝中学校が大きく飛躍していくというか、震災を乗り越えて行く元気をもらうことにつながっていきます。

6 温泉合宿を敢行

私は子どもたちを、どうしてもふかふかの布団と、温泉にゆっくり漬からせてあげたかったので、温泉合宿を敢行します。ひっそりやりたかったのですがバレバレになり、これも全国放送されてしまいます。これが、また新たなストーリーとの出会いとなり奇跡を生み出していきます。それは後々お話しします。

そして、その温泉合宿の帰りに、やはり内陸にある学校は被災地の学校を支援しようということで、募金活動などをしてきていました。その御礼に寄りました。そうしたらその学校の生徒たちは、本当に素晴らしい合唱を聴かせてくれて、本当に心が癒されるのを感じま

した。うちの子たちは、ここに体育座りをしてみんなで寄り添っている状況です。

では、そのすてきな合唱と、募金をしてくれたお金を受け取り、そのお返しにうちの子たちは何ができるのか。うちの子たちは、とにかく校歌を歌うしかなかったのです。その校歌はこのような歌い出しです。「山青く海をめぐらし、美しきわがふるさとよ」と。ふるさとはがれきになっていますから、もうないのです。でも、子どもたちは一生懸命この校歌を歌うのです。

私はこのとき、校長として絶対に表出させてはいけない感情があふれ出します。それは何かというと、この子たちがかわいそうで、不憫で哀れでどうしようもなかった。片方の学校の子たちは、本当に何事もなく普通の生活をしている。でも、この子たちは本当に全てを失っている。そして、何も今は取り戻せていないのです。でも、御礼をしなければと思い、今はなきふるさとの歌を、校歌として一生懸命歌うわけです。私は、この子どもたちが一生懸命歌えば歌うほど、もう揺さぶられてというか耐え切れなくて、この子たちに「絶対に誇りと自信を取り戻させてまたここに帰ってくる」この子たちの前に来て、校歌ではないものをここで披露することを固く誓ったのです。

そのような中で、もう諦めていた制服が届きます。今年いっぱいには私服で過ごそうと思っていたのですが、届きました。このシーンや、先ほどの温泉合宿のシーンが全国ニュースで流れたものがあるので、少し見ていただければと思います。

<映像始>

アナウンサー：「今、欲しいものは、家と思い出」。生徒全員が被災したある中学校では、多くの子どもがそう口をそろえます。再生に向けて動き出した、この中学校に密着しました。
ナレーション：（いらっしやいませ）先月中旬、仙台市内の温泉宿に中学生の姿があった。着くなり向かった先は。（わー、すげえ！）（あっつい）（大丈夫だ）彼らは、石巻市立雄勝中学校の生徒だ。（楽しい？）（楽しい）（ビックバンというのがあるのですが、そこにいる）（僕もビックバン）」。

全校生徒 51 人のほとんどが津波で家を失った。避難所で暮らす生徒も。「生徒をくつろがせたい」。これは、そんな思いから実現した温泉合宿だ。夜、3年生の女子部屋は、好きなアイドルの話で盛り上がっていた。次の瞬間、急に話題が変わる。

（おうちが欲しい人）（はい）（被災した分、思い出いっぱい作りたい。いろんな、一生残るような思い出いっぱい作りたい）（写真撮りたい）（あれでしょう。6年生か、中1からの写真全部ないじゃん）。

学校の再生。移転先の校舎で、それは少しずつかたちになって実現し始めた。（ありがとうございます）（はい）。生徒一人ひとりに手渡されているのは、制服だ。2・3年生のは、みな津波で流された。1年生は初めてのセーラー服。一方の1年男子。学ランに初めて袖を通す。袖は、まだちょっとだけ長い。

生徒に合わせ、これまではジーンズ姿で通した佐藤校長。

（まさか、こんな日が来るとは思はなかったから。良かった）。

久々の制服姿は、避難所の空気も変えた。（久々に見た制服姿や）（でしょう。今日、来

たばかり) (おニューか?) (おニュー (笑)) (良かったね)。母親のまなざしも。(何でこっち見るの?) (普通に制服着ていると、全然被災してないみたいな感じがする)。

そして先週、雄勝中は再生に向け、本格的に動き出した。古タイヤにビニールテープを貼る。何をしているのか。51人全員分の太鼓を作っていたのだ。パチは100円ショップで買った麵棒。古タイヤを置く台は、用務員さんの手作りだ。(これから、みんなで頑張りたいです) (みんな一丸となってできるのでうれしいです)。

この古タイヤを使った復興太鼓。お披露目は8月の予定だ。

<映像終>

まず、制服を着るシーンです。「校長先生、制服を着たい」と、子どもたちは普段は言わないのです。多分、そこまで自分たちがわがままを言ってはいけないと思っていたのかもしれませんが、着たときは本当に喜びました。

やはり、あのシーンを私は忘れることができなくて、私は次の3月には異動してしまうのですが、今日お話しさせていただいていることを本にまとめました。『たくましく生きよ。』という本と、そのあとにこれを新書版にした『奇跡の中学校』という本を出して、この印税を全て雄勝中学校に贈り、これまでの10年間、毎年の新入生全員分の制服を買ってあげることができました。何とか子どもたちを支え続けたいという思いがありましたし、これを買って読んでいただいた方にも感謝したいと思っています。

それから、先ほど「何か自分たちでできるもの」と思ったときに、いろいろありました。合唱をやろうか、ミュージカルをやろうかと思ったのですが、やはり太鼓が自分の思いが一番ストレートにぶつけることができるのではないかとということで「太鼓をやろう」と、あの温泉合宿の夜に私は子どもたちに投げ掛けました。ところが太鼓は全部流されたので、最初は段ボールをたたいてもいいし、木をたたいてもいいからやろうという話をしました。

そうしたら、宿の方が涙を流しながら私のところに寄ってきて、「校長先生、タイヤで練習できるよ」と。「これだ!」と思いました。やはり、今は何もない中で、自分たちで作っていくということで、古タイヤを集めて太鼓を作っていくことをやり始めていくわけです。それも奇跡的な出会いだと思っています。

7 学校づくりの2本の柱

震災後からの動きです。最初の奔走期があります。6月まではみんなからいろいろ支援されていこう、でも7月からは立ち上がるぞという、このような無理な計画を立てました。7月から自力で再生するなどあり得ないのですが、そうもしないと、あと8カ月後くらいに3年生は卒業していくのです。やはり3年生にきちんとした力を付けさせたいと思い、学校づくりの2本の柱を掲げるわけです。

一つは「感謝・誇りと自信」です。これを取り戻させるためにも、「雄勝復興輪太鼓」をやろう。もう一つは、やはり「学力」です。家も財産もなくなった子どもたちがこれからの人生を生きていくためには、学力を身に付けないといけないと、子どもたちもそれに気付きます。そこで「たく塾(たくましく生きよう塾)」をつくります。

まず、古タイヤを、子どもたちでこのように集めて洗っているところです。打面は荷造り用テープです。これも、打面は何がいいのかとたくさん試行錯誤をして、この台も私が考案して作ったわけで、第1号が出来上がります。それで先ほどのテレビ映像になっていくわけです。

実はこの「輪太鼓」の輪は、タイヤの「輪」にしているのですが、これが雄勝中学校の子どもたちの支えになり、やがて世界へと羽ばたかせてくれることになっていくわけです。このときは、そのようなことは夢にも思っていませんでした。

一方、「たく塾」です。やはり勉強する場がないわけです。だから、勉強する場をつくってあげることが心のケアにもつながるという思いで取り組みます。ただ、先生方のスタッフはもうクタクタなので、いろいろな方をお願いしながら開いていくことになります。

夏休み中、朝早くに学校に来て、駅伝の練習や部活動をしたあとにみんなで勉強して、お昼を食べます。またこの食事の確保が大変です。給食はないので、これを自分たちで作ります。このような中でいろいろな方が支援してくださりました。そしてまた午後は勉強して、帰り際には太鼓の練習をして帰ります。

この頃は太鼓が、ただのベニヤ板から「生きる」という字のモチーフがデザイン化されてだんだん進化していきます。太鼓も、得意な子もいれば不得意な子もいます。リズム感などもあります。でも、子どもたちは手に豆を作りながらハマっていきます。

全てもらい物の服を着て、教科書も文房具もそうです。仮設の家に住んで、間借りの校舎に住んで、この体育館も実は遺体安置場で、ここに母親の遺体を探しに来た子もいます。だから、初めてこの体育館で授業をするときは、ここに入っていけるのかと本当に緊張しました。そのような体育館で、このように練習しているのです。

そして、子どもたちは1曲を作り上げます。地域で演奏したいということで、私は半年たった「9.11」の日に、子どもたちを雄勝の校舎の前に連れて行きます。でも、どうしても雄勝には行けない子もいました。やはり、まだ心が揺れて帰れないという子です。もちろんそのような生徒はもう少し時間が必要です。そのような生徒には配慮しながら、他の全校生徒を、「もう一度あそこと向き合おう、そして、次なるステップを踏もう」という思いで連れて行き、校舎への鎮魂と感謝の思いを込めて太鼓を打ちます。多くの地域の方々ややってきて、「子どもたちがこれほど頑張っているなら、私も頑張ろう」と、涙を流してくれました。

子どもたちは、これまで自分たちは支援されるだけだと思っていました。しかし、このように頑張る姿、太鼓を演奏する姿を見せることで、誰かを勇気づけたり元気づけてたりすることができるのではないか、被災した自分たちも何かができるのではないかと思い始めてきます。

8 日本一の修学旅行

そして、私にはもう一つのやるべきことがありました。先ほどのニュース映像で、「今、欲しいのは家と思い出」と、子どもたちが言っていました。家はとても建ててあげることができませんが、思い出だけはと思い、何とか目指したのが修学旅行です。とてもうちの学校

はやれる状況下ではありませんでした。だから、私は保護者会で、すぐに凍結を宣言します。被災直後の各ご家庭では、現金が欲しいので、すぐに積立金を返します。もちろん1, 2年生の遠足などは一切なしです。でも、私は3年生の修学旅行だけは絶対に連れていくと思っていたので、ずっとしたたかにその策を練っていました。

あるとき学年主任さんが、私の目の前でつぶやきます。「校長先生、復元されている東京駅の屋根瓦が、雄勝の石らしいですね。それが今朝の新聞に載っていました」と、ボソッと言います。私は「やった！」と思い、東京駅長に会いに行きます。東京駅長さんに、その屋根の縁で、ここで太鼓を演奏させてくれないかと訴えるわけです。そうすると、素晴らしい駅長さんで、「いいでしょう。やりましょう」と、即決です。地下の広場を改築もして、そこで打たせてもらう。これでもう、心の中でガッツポーズです。これで東京までの新幹線代が浮いたと、なんととっても東京駅長が承諾してくれたのですから。

でも、それでは普通の修学旅行です。近隣の中学校は2泊3日の修学旅行を1泊2日にしたり、中止にした学校もありました。でも私は、さらに京都まで連れて行きたいという思いで、京都までの新幹線代を、今度は企業からの協賛金を、ある人を介して得ることができました。ところが、京都に行って泊まる場所がない。何とかホームステイさせていただきたいと訴えに行きます。しかし京都の方々も、外国の方は泊めたことはあるが、被災地の中学生を泊めることに二の足を踏むのです。それで、私は京都に三度通いました。そして、このようなプレゼンをしながら、「この子たちに思い出を」と訴えていきます。

文科省も後押しをしてくれて、京都でのアピールが功を奏して、何とか8月末に、3年生に京都行きを発表します。3年生を全員集めて、「修学旅行に行くぞ。それも京都だ」と、みんな「ワーッ」と喜びます。でも、何か反応が鈍いのです。なぜだろうと思っていたら、先ほどの長い廊下を、3年生の女の子たちが私を追い掛けてきました。「どうした？」と言うと、「先生、ありがとうございます。京都も最高です。うれしいです。でも、私たちはディズニーランドに行きたい」と言うのです。やはり、あちらの子たちは「修学旅行＝ディズニーランド」なのです。「分かった。東京駅で打ったごほうびで連れて行ってあげよう」ということで、東京で2泊3日、京都で3泊の、合計5泊6日の修学旅行を、金銭的負担を掛けずに何とか作り上げました。それも、帰りは飛行機です。一度も飛行機に乗ったことのない子どもたちにこの機会に飛行機に乗せてあげたいというわがママを私が言って、それも何とかかなえました。

飛行機が仙台空港に着くときには、私は子どもたちと離れて座っていたのですが、もう涙があふれて止まらなくて嗚咽してというか、他の乗客の方々は「何だ、あの人は」という感じで見っていました。本当に、「いつか、この修学旅行を日本一と呼ぶ日が来るから」と、子どもたちに言って別れたのを覚えています。

これが東京駅の屋根瓦で、雄勝の石のスレート瓦です。先ほど申し上げた日本一のシェアを誇るというスレート瓦です。東京駅に行かれたときに、これを見上げて見ていただければと思います。

これが東京駅での演奏シーンです。実はこのときの演奏シーンがものすごく、東京駅の

地下ホールがものすごく混雑している状況で、何百人という人たちがこの演奏を見に来ました。このときに、あまりにも素晴らしい演奏だということで、ある方がこの映像をスマホで撮ってドイツに送ります。そうしたら、今度はドイツから「来ないか」という話になるわけです。



9 ドイツと東京ドームでの「雄勝復興輪太鼓」

そして、それを送ったのが、ここに映っている西島篤師さんという方です。この方は、愛知県の豊橋から、被災した次の月から毎月毎月多くの方を連れて、特産物や義援金を持って必ず被災地に訪れた方です。この方は、日独協会の副会長もしています。実はこの方が、修学旅行から帰ってきた校長室に、パーッと駆け寄ってきました。そのときは西島さんも少し高揚していたように思います。「校長先生！」「どうしたのですか？」と言ったら、「ドイツからオファーが来ました。それも15人も連れてドイツに行ける」という話を持ってきたのです。

私は即答します。「すみません。お断りします」と。「なぜですか」と西島さん。「15人を全校生徒から選ぶことはできません。全校生徒ならお引き受けします」と言い、西島さんは「なるほど。それもそうですね」と言って、またドイツと掛け合い、やがて全校生徒のオファーが届くわけです。そして、後日ですが、西島さんは800万円の現金をご自身の胴巻きに入れて学校にやってくるのです。本当に豪快な方で、本当にすてきな方でした。

それで、何とか1年間、まだいろいろなことがあるのですが、卒業式にこぎつきました。本当に私は、涙で卒業証書が読めませんでした。そして、これ以上に人の名前を心を込めて読むことがあるのだろうかというくらいの卒業式でした。「いつまでもいつまでもたくましく生きよ」というメッセージと同時に、「幸せになれよ」と言い、一人ひとりに手渡しました。

そして、いよいよドイツ行きです。11月にオファーが来てから、5カ月の準備を要しました。どのようなところに行くのかが親は不安なので、冬休みのお正月に、私はドイツに下見に行きました。もちろん自費です。そして、ドイツでどのようなところに泊まり、どのようなものを食べて、どこで演奏するのかを全部チェックしたあと、全部それを親御さんに伝えて、少しでも安心してドイツ行きを了承してもらえるようにしました。さらに着るものはどうする、パスポートはどうする、スーツケースをどうするという、一つ一つ課題をクリアしていくわけです。でも、それこそが生きた学びでした。

そして、ドイツです。移動時間に二十何時間もかかりましたが、ドイツの皆さんからは大歓迎を受けました。5都市で演奏しました。これはベルリンでの演奏風景です。この演奏風景は、昨年度までの「東京書籍」の、「公民」の教科書の表紙の一部に使われていました。この当時はヴォルフスブルクにいた、サッカーの全日本のキャプテンをしていた長谷部選

手も駆けつけてくれました。「このような素晴らしい演奏は聴いたことがない。感動した」と、すぐにブログに載せてくれましたし、子どもたちとずっと関わって励ましてくれていました。ドイツの方々も、本当に涙を流して曲を聴いてくれて、励ましの言葉をたくさん頂きました。本当に感謝でいっぱいです。

そして、ドイツから帰ってきました。今度は、巨人対ヤクルトのプロ野球開幕戦のオープニングセレモニーで打ってほしいというオファーが来るわけです。私は5万人の観客の前で、そして全国へ感謝の気持ちを伝えることができたということなので、お受けします。これはちょうど3月30日なので、私はもう校長としては最後の夜を子どもたちと過ごしたわけです。実際は、この間に隠れて潜んでいます。



ベルリンでの演奏

この太鼓がどのような音を出すのかということで、少し聴いていただきたいと思います。生の音ではないのですが、何もかもなくなった子たちが、この古タイヤの太鼓に込めた思いです。曲は「伊達の黒船太鼓」です。伊達政宗が支倉常長（はせくらつねなが）をヨーロッパに派遣するときに、その船を雄勝で造ったと言われていました。その石碑もあります。その船が出航するシーンが曲になっています。ですから、この子たちが「前に向かって生きていくぞ。未来に向かうぞ」という、そのような姿と重なるのです。東京ドームやドイツなど、いろいろなシーンを折り重ねて1曲の曲を作っているのです少し長いですが、聴いていただければと思います。

<映像：「伊達の黒船太鼓」>

(拍手)

ありがとうございます。映像に拍手を頂くと、本当にうれしく思います。この「雄勝復興輪太鼓」の取り組みについては、今は「学研教育みらい」の中学2年生「道徳」の教科書に、掲載されています。

10 雄勝の今

この写真は、私が住んでいたところです。生徒たちが全員見つけたというその翌日あたりに、自分の家はどうなっているだろうと思ったら、このような状況になっていました。そこで定点撮影をして、時間がたつと全てがれきりが取り除かれて更地になり、やがて季節が移り行くとこのような草だらけになりました。当時を知る人でないと、本当にここに人の営みがあったのだろうかという状況です。特に雄勝は、南三陸町や女川町などから比べると、本当に取り残された復興格差の底辺にあったような感じを受けています。夏になってもこのような状況ですから。

そして今は、高い防潮堤で囲まれ、海が見えない状況になっています。これには賛否両論

あるのですが、本当にコンクリートの要塞化となった町のような感じです。そのような中で、学校は何とか小・中が併設されて再建されるところまで漕ぎ着けております。

11 学校教育の可能性

最後になってきました。3点のお話をさせていただきます。1点は、先ほどお話しした西島さんの話です。西島さんは、ドイツに私たちを導いてくれたあとも、毎月毎月欠かさず支援に来てくれていました。ところが、22回目の支援を終えたあとに、のどにがんが見つかり、入院されます。そのあとも「チーム西島」という同じような思いの方々から西島さんの思いを引き継いで来ていただきました。そのチーム西島の中には、駒木先生もいます。

西島さんも退院して、支援が復活して続くのですが、それほど長くもなく、また再発します。私には「全快するための最後の戦いだ」と言い、笑顔で入院して、そしてまた退院してくるわけです。そのときはもう自分では歩けずに、車いすで奥さまが同行してくるような状況下です。私は会うたびにハグするのですが、もう体がやせ細っていて、私は言葉が出てこないのです。そのような状況下でも、必ず来ていただきました。

43回目の支援が終わったときに、西島さんから私に電話が入ります。「今はどこにいますか」と。「今は京都にいます。京都で講演をしていました」という話をしたら、「じゃあ、もう間に合わないね」というのが最後のやり取りでした。これは、石巻の支援を終えたあとの、仙台からの電話でした。その5日後に息を引き取られます。

本当に身を削り、命を賭してまで誰かのために支援を続けるわけです。それは何なのだろうか。西島さんは、「あのとき被災したのは東北ではない、日本なのだ。みんなで痛みを分かち合うのだ、共有するのだ」という思いをずっと語られて、自分ががんに侵され、むしばまれて、どんどん死が近づいてきても、毎月毎月、車いすに乗ってまでも来るわけです。本当に素晴らしい、すさまじいというか、すごい生きざまに、私は出会ったと思っています。

私は教育者として、彼と出会ったことはものすごく大きいことで、常に机に西島さんの名前を書いて、「自分はそれだけ子どもたちに打ち込んでいるのか」と、いつも自分に問いかけながら西島さんを思っていました。そして、西島さんの生きざまは、必ず語り継いでいこうと思っています。

2点目です。「風化」という言葉が、10年過ぎて言われています。私は、家族を失い、累々として積み上げてきた人生が一瞬にして瓦解してしまった人たち、地域を失い、家を失った人たちに、風化などあるのだろうかと思うのです。もしかしたらうがった言い方かもしれませんが、被災していない人たちが自分たちの戒めのために「風化してしまう」と言っているとしたら思えないのです。もし「風化」という言葉が適しているかどうか分からないが、あのときの大変な思いをした人たちが、心の痛みやいろいろなものが徐々に和らいでいく、癒されていく、そのような「風化」ならあってもいいと思ったりもします。

そして、絶対に忘れてはいけないのは、やはりあの大変な長くて寒い夜を越えていくときに、1個のおにぎりの尊さや、1枚の毛布の温もり、朝が来る喜び、家族がいることのありがたさ、友達がいることのうれしさ、このようなことを実感したわけです。あのときの心の

ありようを風化させてはいけないと思っています。

私は、被災地の子どもたちに、仙台やいろいろなところで小学生・中学生にも講演をします。そのときに本当によく言うのは、「あのときは、全国から、もしくは世界から支援をしてもらいました。それに私たちはどのように応えていくのか、お返しをするのか。あのとき支援してもらった分を、もので返すのか、お金で返すのか。西島さんは、そのようなことを期待して支援したのだろうか」という問いをします。「違うだろう。それは、私たちが今を生きる姿で返していくのだ。前を向いて頑張っている、笑顔で前を見つめて生きている姿だよ。誰よりも仲間を大切に、命を大切に生きている姿で返していこうよ」という話をしています。

3点目は、学校教育の可能性です。私は、全員が無事に生存確認できた夜に、「学校教育ごときに何ができる」と、本当に押しつぶされそうでした。しかし、やはり子どもたちと1年間、教員と一緒に「子どもたちを本当に笑顔にしたい」というその思いで必死になってやってきました。そして、やはり学校教育というのは素晴らしい可能性を秘めていると思っています。学校教育だからこそ、私たちはあの子たちを支えてくることができました。

二十歳近くになった、母親を亡くしたある子が私に言いました。「当時、学校だけが口を開けて、声を出して笑える場だった」と。やはり、そうありたいのです。大変なときこそ、学校はそのような場でありたいと、つくづく感じています。

東京ドーム演奏の翌日、私の校長最後の日、子どもたちに2つのことを言ってお別れをします。一つは「いつまでも元気で」。もう一つは「いつまでも笑顔で」。この2点だけを話しました。そうしたら、子どもたちが私にこのようなメッセージをくれました。生涯の宝物になっています。

「僕たち たくましく生きます」

被災校での話はここまでするわけですが、転勤しなければならぬという中で、私は「この子たちを置いてはいけない」と、ずっと市教委と教育委員会に訴え続けました。私の知らないところでは、校長の留任を求めて全国から署名活動が起きていて、3,143名からという、本当に身に余るような署名を頂いたりもしました。



でも、3月上旬に仙台市教委人事のトップから呼び出されて、「50人の雄勝の生徒を置いてこれられないのは分かる。でも、8万人の仙台の子どもたちのために帰ってきてほしい」と言われました。このような私でも必要としてくれているのだという思いの中で、戻らざるを得なかったわけですが、私の心は雄勝を離れることはなかったのです。

12 笑顔あふれる最高の学校を目指して

そのような思いで、私を呼び戻してくれた仙台市教育委員会です。教育行政は多くの課題を抱えていましたので、その課題解決のため、もしくは新規事業を起こすために力を注いだつもりです。雄勝中の校長の前にも教育委員会には2年ほどいたのですが、校長を経験したあとに、まさか7年もまた行政にいるとは思っていませんでした。そのあとに新設校初代校長として着任するという、次の話につながっていくわけです。

今度は、雄勝中学校から7年間の教育行政の勤務を終えて、8年ぶりに新設校に赴任したという、そこでの話になります。教育行政にいろいろと関わりながら、教育界はいじめ問題やいろいろなことがたくさんあり、どうも閉塞感につつまれているような気がしてなりません。新たな学校をつくる、仙台は18年ぶりの新設校です。とにかくこの教育界に風穴を開けるのだと本気で思い、この新設校に向けて着任していくわけです。

そして4月5日に学校が開校します。このときに、初代生徒会長がこのような言葉を言います。

「この丘に最高の中学校を創って見せます」

私も奮い立つわけです。「創って見せる」と、本当にそのような気持ちで学校づくりを始めました。

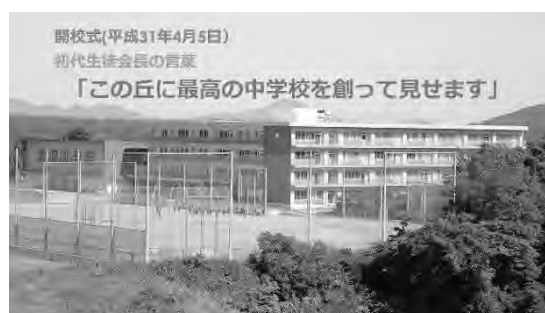
私は校長として2つの学校に勤務して、2つの校訓をつくることになるわけです。校訓

は、迷わずこの言葉にしました。「共に生きる」です。理由は3点あります。一つは、東日本大震災の教訓を受けています。もう一つは、やはり仙台の喫緊の課題であった、いじめ問題に私も深く関わりましたので、そのことも含めています。3点目は、21世紀のど真ん中を生きていく子どもたちは、やはりこの言葉だろうということで掲げます。そして、教育目標、それから3つの「心を育てたい」という思いを話します。そして、「ありがとう」があふれる学校づくりをしていきたいことを、最初に打ち上げるわけです。

私は、あと2年間で退職するという中で、とにかく見通しを立てるということで、4つのステージをロードマップとして掲げて、職員にも保護者にも子どもたちにも提示していきます。その4つのステージとは何か。

まず半年は、母体校からの教育の連続性ということを考えます。それから、14校のさまざまな学校から教員が集まってくるので、やはりいろいろなことをすり合わせていかなければなりません。生徒指導観や教科指導もそうですが、全てです。それが学校風土をつくっていくことになっていくわけです。組織としての一体感を、何とか半年でチームワークをつくっていけないか。「学校を創る、学校は変えられる。そして、新設校だからできることがある。新設校だから、やらねばならないことがある」と、私はこれをいつも言っていました。

まず、最初に先生方にぶつけたのが、これです。「自己肯定感が低い」という実態です。



仙台市の標準学力検査と同時に、生活状況調査をするわけです。そのときに、仙台市の平均よりも、本校の開校時の子どもたちの自己肯定感が低かったのです。私は、これをむちゃぶりします。「自己肯定感を、半年で市の平均を超すことをみんなでやる」ということを宣言します。

特に特別なことはありません。まず子どもたちをいっぱい褒めよう。そして、認めて、評価してあげよう。そして「ありがとう」をいっぱい言ってあげよう。「ありがとう」が言える教師であろう。4月の開校時には、子どもたちは前の学校のことをイメージしていますから、ここから新たな教員の取り組みが始まります。

実際に、「先生は、あなたの良いところを認めてくれていると思うか」も、4月開校時には仙台市よりも低いので、新たなスタッフで先ほどのようなことをやり始めるわけです。すると、10月中旬にはこのような結果になっていきます。子どもたちは、「先生方が自分たちのことを認めてくれている」と思い始めるわけです。

同時に、自己肯定感を肯定的に見ている2つの、「どちらかといえばそう思う」では、仙台市の平均を超えるわけです。私は「やった！」と思いました。実は、自己肯定感というものが半年で変わるのかと不安でした。だから、これがどのくらい内面化、行動化しているかわからない部分があるのですが、少なくとも子どもたちはこのような結果を出しています。ある意味では、教員が結果を出したのです。

初めてのスタッフで、メンバーで同じような方向性を向いて取り組んだところ、半年で自己肯定感が変わるということをや、ある意味では小さな成功体験ですが、みんなで共有できたのです。「教員が同じ方向で同じ取り組みをしっかりと関わっていけば、子どもたちは半年で変わるのだと、これが教育の面白さでありダイナミズムだ」ということを先生方に訴えていくわけです。心の中では「このメンバーならこの学校を変えていけるぞ、創っていけるぞ」と思ったわけです。そのようなことを、まず手始めにやりました。

13 錦中スタイルの創造

そして、ステージ2に入っていきます。ここからです。いよいよ大胆なスクラップを始めます。これが、とにかくまずはやってみます。それは意味があるのか議論して、議論で終わっては駄目です。まずやってみようと、「錦中スタイルの創造（Ⅰ・Ⅱ）」に入っていきます。思い切ったスクラップをどこまでできるかということです。

ここから話すことは、もしかしたらすごい先行事例でも何でもないかもしれませんが、私は、これをやるときに本屋に行き、学校改革の本などいろいろ手に取ったのですが、私は見ませんでした。やめました。そのような誰かの後追いではなくて、自分で子どもたちの実態や地域の実態を見据えて、肌感覚で感じてこの学校をつくろうと、職員と共有してつくっていこう。それでいいのだ。二番煎じだろうが何だろうが構わない。この子たちにとって必要なことをやっていこうということで、取り組みを始めて行きます。

そのあとはステージ3、ここからが大変です。要するに、全部削ったあとに、錦中としてどのようなことをやるのかという「ビルド」に入ります。そして、ステージ4では、その定

着をやらうとします。そして、創造Ⅳに入っていきます。何を言いたいかというと、学校教育の中で常にこの創造のサイクルをつくっていききたいのです。

そして、働き方改革です。私は行政のときもずっと思っていたのですが、現場に戻っても、学校は「ブラック」と言われています。どうも教員自らが「学校はブラックなのだ」ということを容認しているというか、「どうせ改革なんて無理だから、文科省や教育委員会がドンと上から落としてこないと、学校など変えられない」というような諦め感があると思っています。やはり、それを脱却しなければいけません。これが錦中の挑戦だと訴えていきます。

職員も新米だろうがベテランだろうが、みんなの発想が学校をつくっていくのだということで、夏休みに課題を与えます。今までやってきたことで、何が削れるか、何が必要か、職員に提案してもらいました。面白いのが集まってきました。そこから私が全部整理していくわけですが、若手教員の発案をどんどん取り入れて学校改革につなげていくことで、教員の学校経営の参画意識を調整していくという手法を取っていくわけです。とにかくどのような小さなことでもいい、小さなことでも一つ一つ、削ることは削る、つくることはつくるという話をしていきます。

先ほど言いたかったのは、これです。「教育は本来、アグレッシブでポジティブでクリエイティブなもの」だと思っています。これが後ろ向きや消極的になったときに、教育は置いていかれることになると思います。

14 「錦タイム」の導入

このような意識で手始めにやったことは、まず週時程を変えます。普通は、毎日6時間授業をすることが、だいたい学校の週スタイルだと思いますが、私は7時間授業を火曜日に置いて、水曜日は午前授業にするという、リズムをつける週カリキュラムを実行します。これを「錦タイム」としました。これは、子どもたちも喜びました。週1回は午前授業があるのは、何とすてきなのだろうか。これで授業時数が保てるのかとよく言われたのですが、週時数は変わらずにやったので、影響は全くありません。

今は、週に1回は部活に休養日を設けなければならないとなっています。部はみんなバラバラに取ります。どうせなら1日に統一しようと、そしてその日は部活なしにして7時間にしよう。完全下校時間は、教員の勤務時間と同じ16時45分にします。

生徒たちには、いつもより15分勉強時間が長くなるが、頑張ろうと。その代わり、水曜日は午前授業で、部活動が3時間もできるという話をするわけです。完全下校は、同じ16時45分です。教員の退勤時間と一緒にです。これを「錦タイム」として取り入れていくわけです。

3年生はどうするかというと、ここは割愛します。実際にはこれをいろいろ分析していくわけです。要するに、うちの学校の生徒の特徴は、塾で勉強するが家では勉強しないという、学習の自立が成されていないことが課題です。これを何とかしようと、また私が提案していきます。単純に言えば、3年生は勉強する日にしましょうと。「錦タイム」をどう扱うか、午前授業はいろいろなことができます。これは後々、さらに発展させていきます。

先生たちです。火・水の退勤時間には、何と子どもたちは全員いないのです。実は、中学校の一番のネックは部活動です。部活動が、夏場だと夜の6時半か7時まで延長でやっています。教員は16時45分が退勤時間です。職員は部活動の時間に一緒に指導に入り、帰ったあとからその日の残務整理をして翌日の準備をするから、当然退勤は夜の8時や9時になります。これがずっと続いています。

でも、うちの学校は、この「錦タイム」の導入により、週5日間のうち2日間は、子どもたちが16時45分には学校にいないことをつくり出します。デメリットはないと思っています。2日のうち1回は必ず定時に帰ることと厳命し、できれば2日とも帰ろうと推奨しました。そして、各職員が定時退勤日を「退勤ボード」に示し、完全に見える化をします。必ず意思表示をするようにします。どちらに帰るのか、真ん中がどちらも帰る日、そのように意思表示をして必ず帰りましょうというわけです。

多くの学校でも働き方改革に向けて週に1回とかのノー残業デー等をやるのですが、仕事の絶対量が変わらなければ、当然早く帰った日のしわ寄せが週末や休日に来て、学校に来てやるか家に持ち帰ることになります。それでは意味がないという議論が、普通はあります。でも、うちの場合は、確実に物理的に量を減らしています。これは、これから話をします。

もう一つは、このように見える化をして意思表示を職員室の中ですることにより、1週間の自分の時間の使い方の濃淡というか軽重というかをしっかりつけようと働きかけました。教員は、効率化よりも内容を重視するので、時間に関係なくやります。やはりわれわれは時間調整能力をきちんとつけることも大事なのだと、それは子どもたちのより豊かな授業や生徒指導に直結していくことをアピールしていきます。

15 スクラップ

次に、いよいよ会議等の削減です。職員会議を毎月やっていました。私は、それを7回に減らしました。職員会議のための準備委員会の運営委員会があるのですが、これを廃止しました。職員会議に提案するための分掌部会があるのですが、それも年に7回にしました。計22回の会議の削減を断行します。これは先ほど話したところになります。

そして、精選もします。母体校では、生徒指導担当者会は毎週やっていました。学年主任者会も毎週やっていました。これを全部隔週にしました。ただ、いろいろな生徒情報は欠かさずに入れることにしています。朝の打ち合わせも、週3日から2日にしました。とにかく、ギリギリまで減らそうとしました。そして、どうしても足りないとなれば、少しずつ増やせばいいのです。まずは減らして、どこまでやれるのかとします。

次は行事の精選です。野外活動をやめます。文化祭は、平日の午前中にしました。運動会には行わない。学年ごとは可です。要するに、行事を新設校は最初から大きいものをつくらない、コンパクト化して始める。そして、例えば、これが学校づくりの大事な核となる行事となれば、もっと大きくし充実させていけばいいという考え方です。ところが、文化祭が平日でも盛り上がります。保護者はたくさん来るし、子どもたちもすごかったのです。運動会も学年ごとがこれほど盛り上がるのかという感じに、子どもたちはやるのです。

例えば、(5)の「生徒会誌を作成しない」も、新設校の段階で既に予算化されていたが、「必要ある？」ということから廃止し、生徒会の委員会の数も減らしていきました。

それから、大きかったのはこれです。定期考査の問題を外注することです。仙台ではうちが初めて、県内では他に1校しかありませんでした。先生たちは、問題を作り採点する業務は本当に大変なのです。もちろん、当然そこに意味はあるのですが、客観性や公平性の確保という意味では、こちらにも意味があります。結局、これも断行していきます。

それから、結構やっている学校も増えてきているのですが、通信表の所見欄をなくすことです。これは、保護者会で結構反発があるだろうと理論武装をして臨んだら、拍子抜けするほどスルッといきました。別に保護者は、今はそこに目が行っていないのでしょうか。今は、当たり障りのないようなことしか書けないので、昔のようには書けないのです。だから、あまり意味を持たないというか、逆に保護者欄がなくなったことで、保護者が喜んでいました。だから、通信表は回収せず渡し放しです。

この通信表の所見欄は、担任が書き、主任が見て、教務主任が見て、教頭が見て、校長が見て、そして差し戻すという繰り返しです。その労力が一気になくなり、逆にじっくり自分の教科の評価ができるというメリットがありました。これは、他のたくさんの学校の校長さんからも問い合わせがありました。結構踏み込みました。これは、今は全国的にも増えていると思います。

部活です。部活の数を減らすのは大変です。ところが、母体校が1,200人という、東日本で一番のマンモス校から、516人がうちの学校に分かれたわけです。それでも部活の数は変わらなかったの、それはもう大変でした。複数で顧問も持てないので、これを断行します。普通は数年かけてやるのですが、次の校長にこれを委ねることはできないと思い、私の代でやると、嫌われ者になってもいいからこれをやり抜きました。

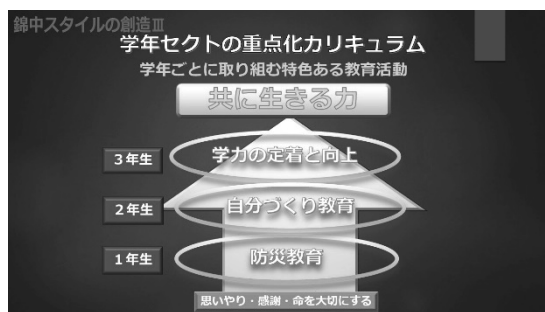
でも、これは校長としてもきついことでした。募集しない部の部員を体育館に呼んで話した途端に、子どもたちが泣き出すのです。でも、これを顧問に先頭立ってやらせたりすることは一切なくて、全て私が背負うことで、その涙の矛先も私が受け止めました。保護者との説明会ももめにもめました、全部を私が一手に引き受けました。今年の6月の中総体以降、おそらく複数顧問性が確立しているのではないかと思います。

いよいよスクラップが終わり、今度はビルドです。どのような学校をつくるのか、これが本当の学校づくりの始まりだということで、去年の1月に構想を練り、教員や保護者、PTA役員にぶつけていますが、ここでコロナ禍が発生するわけです。時間がなくなってきたので、急ぎます。

16 ビルド

どのようなビルドをしたのか、少し足早に行きます。一つは、学年セクトのカリキュラムです。要するに、1週間に1回のアクセントを置いたことと一緒に、1年生は防災教育、2年生は自分づくり教育、3年生はこのようなものを作り、その中で3つの心の柱を通して育てようという、これがまず全体の構想です。

そして、「錦タイム」をさらに発展させて、「錦オール」をつくろうという方向に行きま
す。要するに、週1日の「錦タイム」をさら
に発展させて、「心を育む日」としたのです。
まずは服装を自由にしました。私服でも制服
でも可ですが、私服の日ではありません。互
いを認め合うなど、そのような日です。まず



は、かたちとしてそのような日にしました。雄勝中学時代は制服がなく過ごしている私にと
っては、制服の意味を考えることはすごく大きくて、このような日にしました。

また、道徳です。普通の学校は、道徳を別の日に時間もずらしてバラバラに設けているの
ですが、うちはこの日の3時間目に、「共に生きる」を考える日だとやっていきます。道徳
の授業の先生方の力量差を埋めることは、結構大変です。ものすごい新任とベテランでは全
く違います。1年間受けたら、子どもたちの道徳性の育ちは全然違います。そこで、一つは
ローテーション方式を取り入れます。学年全員で道徳をして、同じ教材で6クラスを全部や
ると、修正が効いてどんどん授業力が上がっていきます。自分の財産になっていくという手
です。

そしてさらには、朝、私服かどうかを自分で決めて学校に行くと、「ともいきミニッツ」
が始まります。「共に生きる」を考える、その日のプロローグです。朝、学校に行ったら、
先生方が5分間、何かを提示します。先生たちが悩んだり迷ったりするものを、子どもたち
にぶつけます。絵でも小説の一説でもいい、新聞記事でもいい、何かの言葉でもいい、音楽
でもいい、子どもたちが10分間はそれについて考えを書く。そして1日が始まるという「と
もいきミニッツ」です。

それから「いじめゼロ」の日。これは飛ばしましょう。時間がありません。

校長室の開放などは、コロナ禍でできませんでした。

それから、「錦オール」の日の3年生の早い帰りをどう有効活用するかが難問でした。こ
れは3年くらいかけてやろうと思いましたが、今はとにかく子どもたちに自主的に勉強で
きる時間の計画表を書かせてやっていました。例示のこの子などは、水曜日は帰宅してから
6.5時間も勉強していたようです。実際に卒業間際にアンケートを取ったところ、72%の子
どもたちが、この午前授業の日の午後を、すごく有効に勉強に使ったとのことでした。

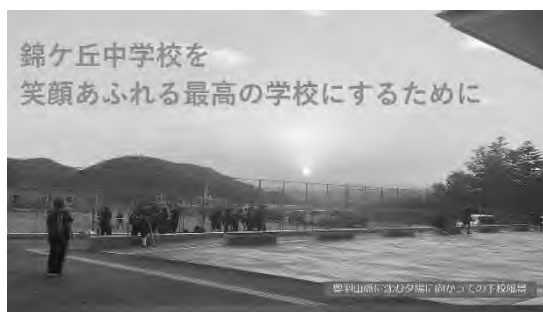
このような話を、私はステージの節目節目に、必ず保護者と子どもたちに話します。面白
かったのは、終業式の日、最初の創造スタイルⅠとⅡの話を、大型スクリーンでプレゼン
し「来学期からこうやるぞ」と話したら、私がステージを降りる瞬間に拍手が起きて鳴りや
みませんでした。私が下まで降りたときに、教頭が「鳴りやまないですね」と。子どもたち
も新たな取り組みを望んでいるのです。

この時、生徒と教員が一緒になって、ここに最高の学校を創るという思いを新たにしまし
た。

このスライドは私の大好きな下校シーンです。うちの子どもたちは、奥羽山脈に沈む夕日

に向かって下校していきます。それを職員みんなで並んで送り出すのです。このシーンが大好きです。

私は、被災当時は宮城県で一番若い校長でした。校長最後の1年は、コロナ禍に襲われるわけです。この両者を経験した校長は、少なくとも宮城県では私だけです。そのような



経験から私が思うのは、両者を逆境と言っているかどうか分からないのですが、こうようなときこそ学びのチャンスだと思っています。心を育むチャンスだと。

だから、子どもたちの人生の歴史の中に、震災やコロナ禍を、ただ単に負の遺産として残したくないのです。あのときがあったからこそ自分は成長できたと、あれが、自分を変えた、強くしたと。教員もそうだと思います。やはり、そのように導くことが、われわれ学校教育に関わる者や教師に必要ではないかと思っています。

長い間のご静聴ありがとうございました。（拍手）

○司会者 佐藤先生、素晴らしいお話をありがとうございました。

なお、本講演の内容とも関って、『「たくましく生きよ」そして「共に生きる」—東日本大震災とコロナ禍の中で、学校教育の可能性に挑んだ、ある校長の物語—』（ワニブックス、2021年12月）が刊行されています。ぜひご一読ください。